

あとがき

この小さな本は、平成十七年六月から平成二十年三月までの二年九ヶ月、福井新聞の「北風南風」欄に掲載された二十九回の小文に若干の加筆訂正をし、出ることがなかった三十回目の「橋本芳契先生」を付け加えて出来たものである。「北風南風」は平成二十年の三月をもって終了した。

私は平成十七年三月末日、三十六年間勤めた県の職員としての仕事を終えた。終わつたことを思うよりこれから何をしようかということに心は向いていた。どこかに何かを書きたかった。幸い、山岳会の先輩を介して当時福井新聞の論説副委員長であった渡辺数巳さんを紹介してもらうことができ、最初の拙稿「十三名の外国人自転車旅行者」を見てもらったところ、掲載してもいいという返事をいただいた。本当にありがたかった。渡辺さんはその後病に倒れ駆け抜けるように逝ってしまわれた。

新聞にはつらいことがたくさん出ている。「北風南風」は小さなコラムだが、せめて

この欄に目を通して下さった方がそのときだけでもつらい世の中から離れることが出来るようなそんなことを書こうと思った。縁あって、山登りと海外旅行と仏教の勉強を長いこと続けてきた。そこに題材を求めればなんとか出来そうに思った。伝えたいことはたくさんあったので、一ヶ月に一度いろんなことに想いをはせて書くのは楽しかった。

山と海外旅行と仏教について少しだけ。

山に登り始めてもう四十年以上が経過した。所属している福井山岳会は職域の同好会と違って実に様々な職業を持った人々の集まりである。会のメンバーだけで冠婚葬祭を取り仕切れるなどという冗談がでるほどである。福井山岳会ほど素晴らしい山の会はどこにもないと思っている。山の技術を学び一年中山に入ることが出来るようになった幸せは言うまでもないが、一日あるいは数日山と一緒に過ごしてみんなから聞く話のおもしろいこと、山の会に入らずにいたら知らずにいたであろう、貴重な財産を今いっぱい持っている。

初めて外国旅行に出たのは、一九七八年（昭和四三年）のインドであり、もう三〇年

以上昔のことになる。団体旅行はしないと決めていたので、外国に行く技術（安い切符を買うこと、旅先で宿を取ること、移動手段の確保など結構ある）も自分で覚えるしかなかった。一人で出かけていくのと誰かと一緒に行くのと、メモをめくると前者のほうが多い。緊張して旅している分、いろんな場面を今でも鮮明に覚えている。

東西冷戦が崩壊する前の一九八九年に旧ユーゴスラビヤとハンガリーを訪れた。その五年後の一九九四年、ハンガリーに再び行く機会があった（いずれも放射線に関する国際学会に出席のため）。ブダペストでは旧ソビエト時代に付けられた路地の名称がすべて抹消され新しくなっていた。ペンを乗り回す若者と路地に立って刺繍のハンカチを売る老女と、それまでにない大きな経済的格差を目にした。返還直前の香港では宿にしたY M C Aの従業員から中国の支配が来るまでに逃げることの出来る人は逃げ出していると聞いた。自分は貧乏で逃げ出せないとも。五回訪問したインドのことはここに書ききれない。

長くてせいぜい2週間余りの短い旅を繰り返してきたが、専門の仕事を持って研究発表という形で国際会議に出席し、そこで知り合った人から聞く世界の様々な国の現状は

新聞やテレビでは伝えられていないこともあった。旅行ごとに詳細なメモを取って帰国後記憶が新鮮なうちに旅行記を書き続けてきたので、いつかまとめて残したいと思っ
ている。

仏教のことは、山や旅行のように簡単に要約して書くことはできない。一八歳から二二歳まで金沢で四年間過ごしたことが決定的なことであつたことだけは分かる。仏教という土台で今まで長いことかかつて分かつたことは非常に貴重なことであり、これからもこれまで考え分かつたことの先を考え続けていくことになると思う。そこでのテーマは、年を経るにつれて変化しており（その変化は直線的と言うより螺旋型・往復よたよた型）このあとどこに行くのは定かではないけれど、生まれてきたことと死ぬことのみを巡ってああでもないこうでもないと思走しそうである。しかしそれら色々ごちやごちやした問いが徐々にどうでもよくなるのではないかという予感がある。はつきりと言ひ切れることが増えていくことが教えてもらった橋本先生への恩返しだと思つている。仏教への関わりはそんなふうにしかな言えない。

新聞のコラムに書いたものをこのような形で残そうと決心できたのは、連載が始まっ

たころ福井新聞小浜支社の支社長であった遠藤富美夫さんが小生の拙稿をおもしろいと
言つて下さったからである。誉められると何の疑いも持たず、そうかおもしろいのかと、
それならと思つて書いていた。原稿がメールで往復する間に博覧強記の遠藤さんから興
味深い話をたくさん聞くことが出来た。いろんなことを思うと、いくら感謝しても足り
ない。誠にありがとうございます。

最後に本書の題名について。

家にいた二人の娘と、本にして出すのだけだかなかなかいいタイトルが思い浮かばな
いと話していたら、「旅行鞆はいつもリュック」はどうかと、どちらかの子が言った。
それにしようとするに決まった。リュックでおわるのはなんとなく尻すばみなので、結
局『旅行鞆はいつもリュックサック』になった。正確に言えば私の旅は初めからリュッ
クだけではなかったし、仕事がらみではスーツケースに背広や会議の資料を入れて出か
けたことも何度かあったが、それでも「リュックで旅行」は自分のスタイルであること
には間違いない。お世話になるところで「これだけで来たのか」と荷物少なさに呆れ

られたこともあった。この本もそんな軽い本、軽いけれども大切なものは確かに入っているものとして残ればいいと思っている。

二〇〇八年八月